

大津 歴博 だより

企画展

近江の国府と郡衙^{ぐんが}

—発掘された古代の役所—

2005
No.57

2月26日(土)～4月17日(日)



近江国庁跡出土 飛雲文鬼瓦 滋賀県教育委員会蔵

この鬼瓦に表されている飛雲文は、近江国府・国庁を特徴づける文様です。この文様を使用した遺物は、国府関連遺跡（国庁・堂ノ上遺跡・惣山遺跡・青江遺跡）などで多く出土しています。



大津市歴史博物館

近江の国府と郡衙こくふ ぐんが

発掘された古代の役所

古代、中央政府は全国を六〇余の国・島に分け、その下に郡・里（郷）を置いて地方を治めました。そして、各国には国府を、郡には郡衙の各役所が設けられたと考えられています。また、道の整備を行い、駅を設置し交通の便を図りました。近江国は国内を東山道・東海道・北陸道のそれぞれの道が通り、また三関といわれる愛発関・不破関・鈴鹿関のすべてに関わるなど中央政府にとって重要な国でした。

そこで、今回の企画展では、近江国府や各郡の郡衙と考えられる遺跡について考古学による成果を紹介します。ここでは、墨書土器や硯類といった文字に関係する遺物など一般集落とは異なる特殊な遺物を中心に展示します。あわせて、国府・郡衙以外の官衙遺跡（駅家・郷倉など）についても最新情報を紹介します。

1 近江国府成立前史

近江国府が置かれた瀬田丘陵一帯の国府以前の

遺跡から、国府成立直前の歴史を紹介します。今回は、主に野畑遺跡で発掘された資料を中心に、古墳時代と考えられる土器のほか、製鉄に関連するフイゴの羽口などを展示します。



野畑遺跡 フイゴ羽口等 滋賀県教育委員会蔵

2 近江国府の成立と展開

近江国府は昭和三〇年代末から発掘調査が行なわれ、いまま遺跡整備に並行して発掘調査が続けられています。ここでは、近江国府の最近の調査で見つかった遺物や遺構の状況を中心に国府の様子について紹介します。あわせて、国府に伴う倉庫群と考えられる惣山遺跡や、勢多駅跡と考えられる堂ノ上遺跡、近江国分寺跡と見られる瀬田廃寺など、周辺の国府にかかわる遺跡からの出土遺物等も紹介します。

国府は、地方政治を行う場、国府は、国府・周辺の施設・役人の家・市場などを含めた範囲をさします。

3 近江の郡衙

近江国内は十二の郡に分けられ、各郡に郡衙が置かれていたと考えられています。今回は、栗太



近江国府跡 「厨」墨書土器 滋賀県教育委員会蔵



近江国府跡 鬼瓦 滋賀県教育委員会蔵

郡衙と考えられる岡遺跡・手原遺跡（以上栗東市）、高島郡衙と考えられている日置前遺跡・鴨遺跡（以上高島市）などを中心に、郡衙の様子を紹介します。



鴨遺跡 緑釉陶器
高島歴史民俗資料館蔵



御倉遺跡（草津市）「郡家有」墨書土器
滋賀県教育委員会蔵

4 その他の官衙遺跡

各郡内では、郡衙のほかにも官衙と考えられる遺構・遺物をもつ遺跡が見つかっています。これ

らについては、在地の有力者の邸宅跡や、郡衙の出先機関、あるいは郷に関連した施設などいくつか説があります。ここでは栗東郡内にあたる草津市の大将軍遺跡でみつかった墨書土器、矢倉口遺跡の出土品を通して、それぞれの遺跡の性格や、また役人の生活なども紹介します。

5 都と近江

各地の郡衙、近江国府に集められた米や特産物などの税は都へと運ばれました。ここでは、平城京や長岡京で出土した各種荷物に付けられたと考えられる木簡（荷札木簡）のうち近江の地名が書かれたものを展示します。実際に近江から都への物資の動きを見ることができ重要な資料です。



大将軍遺跡「税」「高野郷長」墨書土器 草津市教育委員会蔵

また、紫香楽宮で出土した日本各地の地名・特産物の書かれた木簡からは、都に全国から物が集まっていたことが分かります。このような文字資料から当時の人と物の流れを紹介します。

この他、最近見つかった、膳所城下町遺跡（禾津頓宮）や関ノ津遺跡（田上山作所か）など、近江で見られる都と関連する施設についても紹介します。

平城京出土木簡 奈良文化財研究所蔵



〔表〕「近江国坂田郡上坂郷戸主」

〔裏〕「酒今万呂戸庸六斗」

〔関連講座〕（要事前申込）

三月五日（土）「発掘された古代の役所」

雨森 智美氏

（栗東市文化体育振興事業団文化財センター主催）

三月一九日（土）「近江国庁跡の発掘調査」

岩橋 隆浩氏

（滋賀県教育委員会文化財保護課主催）

近江八景―浮世絵編―

■平成17年2月22日(火)～4月10日(日)

美人画や役者絵からはじまった浮世絵版画において、名所絵作品の登場は比較的遅く、一八世紀の中期から徐々に手がけられるようになりました。それは、庶民の間に旅行や物見遊山などの行楽が定着したことから呼応しています。本来は、文化人の歌の題材であった近江八景が、実際に訪れる観光名所として大衆の間に広まることになったのです。近江八景は、すでに様々な美術工芸品に表現されてきました。それだけに浮世絵版画における名所絵作品のなかにも、近江八景が登場したのも必然といえます。それらは、大和絵風や名所図会風の一八世紀の描写にはじまり、北斎作品等にもみる遠近法や陰影が誇張された異国的な表現、そして臨場感や叙情性あふれる広重の世界、さらに近代の詩情にみちた伊東深水へと展開してゆきます。その美しい風光もさることながら、揃い物作品としても恰好の題材であったので、多彩な顔ぶれの浮世絵師たちが近江八景を手がけました。本展では、時代とともに進化してゆく多様な近江八景の浮世絵作品を紹介します。



近江八景(栄久堂板)
矢橋綿帆 歌川広重画 本館蔵

◎発刊のお知らせ

「大津 歴史と文化 身近な歴史再発見！」

歴史博物館では、小冊子「大津 歴史と文化」を発刊しました。本書は、大津の歴史や文化を知るうえで欠かすことのできない市内の史跡や名勝、寺社などから約一四〇カ所を選び、最新の情報を盛り込んで紹介しています。

また、持ち歩きしやすいA五版のハンディサイズで、各項目の文末には最寄りの交通機関を記し、巻末にはそれぞれの所在地を示した略地図を添付しています。本書を片手に「史跡めぐり」や「歴史探訪」をしてみるのはいかがでしょうか。今まで気づかなかった大津の歴史と文化を再発見することができます。ぜひ見てください。

【価 格】 六〇〇円

【サイズ】 A五版 一四四ページ

【頒布場所】 大津市歴史博物館（詳細はお問い合わせください。）



(表紙)

大津市内の寺院史や天台仏教を研究するにあたり、避けて通れないのが叡山文庫です。その名のとおり、比叡山の書庫の役割を果たす、総冊数百三十万冊余を誇る大図書館で、延暦寺の里坊がたちならぶ坂本に所在しています。

比叡山はその開創当時から、（まこと）經典などを収蔵する蔵を重要視してきました。最澄が比叡山寺（延暦寺）の中心として建立した一乗止観院（根本中堂）には、葉師如来を奉る止観院と文殊堂そして根本経蔵からなっており、中心伽藍の一つとして扱われていたのです。その後も、円仁が将来した「真言蔵」や、円珍の「山王蔵」などは特に有名で、それら以外にも、三塔十六谷の各エリアや、山坊、さらに山麓の各里坊などにも多数の蔵が所在していました。戦国期の戦乱により、比叡山は大打撃を受け、これらの貴重書を納めた蔵も失われましたが、一山の復興に伴い南光坊天海の「叡山天海蔵」（山門蔵）や、実後の東塔南谷実蔵坊の「真如蔵」をはじめ、積極的に書写蒐集が進められました。これらの比叡山の各蔵に伝来した史料を、大正一〇年（一九二一）の伝教大師一千百年御遠忌記念事業として収蔵そして公開のために創設されたのが叡山文庫です。それにしても、叡山文庫は、複雑で奥深く、この膨大な史料群を調

べるにあたり、まず参照すべきなのは、「昭和現存天台書籍綜合目録」や「国書総目録」そして、「叡山文庫文書絵図目録」等です。特に後者は、東塔止観院文書など約三万点もの各里坊等に伝わった古文書と古絵図の目録であり、蔵書ごとに記載されていて、基本書となります。これらで当たりをつけて、実際に文庫を訪れ、書名カードを検索し、さらに、開架されている各蔵書の目録を一つずつ調べなければなりません。そうして漸く書名と請求番号を調べたうえで、閲覧請求を行うわけです。しかし、同じ書名ものが沢山あり、それらが同じ本の写本の場合もあれば、部分的に書写したもので、または、全く違うものの場合もあります。また、「山門新記」（滋賀院文書）と「山門三塔并葛川記録」（止観院文書）「三塔諸堂之由緒付葛川」（生源寺文書）などのように、違う書名であるのに、記述が同じ物という場合も多数あり、複雑です。また、「阿婆縛抄」のように一つの書名で、大量に巻数があるもの、さらには古絵図のなかには、余りにも大きすぎて文庫では開けられないものもあります。まさに根気とやる気が必要で、その分、新たな史料に出会ったときの喜びは格別です。何よりも、原資料を実際に手にして調べる醍醐味は叡山文庫ならではのものです。そし

て、やっと史料を手にして初めて研究が出来るわけですが、開いてみると意中のものではないこともしばしば。更なる困惑がいつも待ち受けています。このように困ったときは、文庫長をはじめとした職員の方々に相談してアドバイスを戴くのが一番です。みなさんとのコミュニケーションは、難解な古文書、古記録と向かい合う力を与えてくれます。

なお、利用するにあたり、①一週間以上前に電話（〇七七・五七八・〇五〇五）で予約、②当日は紹介状（所属長もしくは延暦寺一山住職）と身分証明書持参、③館外貸出しや写真撮影は許可してない（一部コピーは可）などの規定があります。

このような比叡山や坂本の史料の宝庫である叡山文庫には、まだまだ十二分に利用されていない史料が多く眠っており、今後は、より一層、積極的な活用が必要と思われれます。

（寺島典人）



叡山文庫外観

収蔵品紹介

48

中国版独り忠臣蔵

豫讓裂衣図絵馬

紀樛亭

享和元年（一八〇一） 一面 園城寺蔵

本作品は、中国春秋末〜戦国時代の義士・豫讓

にまつわる故事を描いた絵馬です。彼は主君である晋の智伯への忠義厚い人物でした。というのも、それまで范氏と中行氏の二氏に仕えたものの、両者とも彼を用いず、豫讓は彼らのもとを去って智伯に仕え、智伯は彼を重く用いるばかりか、国士の礼を以って遇したからです。しかし後年、智伯が趙の無卹を攻めたところ、逆に無卹は韓・魏と共に謀して智伯を攻め滅ぼし（晋陽の戦い、前四〇三年）、智伯の領地を三分割したのでした。それほどばかりか、無卹は智伯への恨みのあまり、彼の頭蓋骨を漆で塗りかため酒器としたのです。山中に逃げ延びていた豫讓は、主君への屈辱を晴らそうと復讐を誓い、囚人になりすまして宮殿に潜入します。そして、厠の壁塗りの苦役作業に従事しながら、無卹が用を足しに来る隙を狙ったものの、正体がばれ捕らえられます。しかし、義に殉じようとする豫讓の姿に、無卹は彼を義士として釈放しました。にもかかわらず、復讐を誓う豫讓は、今度は炭を呑んで声をつぶし、身に漆を塗って病人を装い、妻でさえも見抜けぬほどの姿となり、市中に潜伏して無卹の外出の機会をうかがいまし

た。ある日、橋のたもとで待ち伏せしていたところへ無卹の馬車が近づきました。しかし馬が豫讓の気配におびえたため彼は発見され、再び捕らえられてしまいます。豫讓の変わり果てた姿に、さすがの無卹も胸をえぐられ動揺しましたが、一度ならず二度までも己の命を狙った豫讓を許すことはできませんでした。周囲の兵士に合図を送ると、豫讓は、先に許してもらった礼を無卹に述べ、そして更に最後の願ひとして、無卹の着衣を借り受け、これを撃って、せめて仇討ちのかわりとしたいと、その心のうちを述べました。無卹はこれを義として衣服を与え、豫讓は剣を抜いて三たび跳ね、天に叫んでこれを撃って本懐を遂げ、最期を迎えたのです。

強引に例えれば、中国における単独赤穂浪士（しかも宿願成就せず）ともいえる画題です。したがって、豫讓にまつわる故事成語もひとつやふたつではなく、江戸時代は比較的知られた故事だったと思われまふ。呉春とならぶ与謝蕪村の門人として絵と俳諧を学び、蕪村風の作品を描いた樛亭は、人物画も多く残していますが、多くは俳画の延長線上にある親しみやすく簡略な人物表現の作品で

す。本作は、それらとは対極的な、厳しい顔つきとすさんだ容貌の人物を描いており、異色の樛亭画となつていますが、それは、とりもなおさず、樛亭もこの故事をよく理解していたことを物語っています。

（横谷賢一郎）



大津歴博だより No.57
平成17年2月1日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

100